

===巻頭文===

“絆“

持田由幸 (神奈川県大学)

信州の大町から長野市に通じる県道沿いに“学生村、新行”が有る。長い冬の寒い帳が終わった5月になると、後立山連峰の峰々が連なる白馬岳の白馬、五竜岳の武田菱、双耳峰の鹿島鍾を過ぎて爺ヶ岳には種まき爺さんの残雪の姿を現す。稲の種まきも終わり、水を満々と湛え、稲の緑豊かな風景が、山峰群を後立てにして出現する。夏が近づいた7月末には、現在では考えられない程、畑一面ホタルが乱舞した。夏が来ると私の横浜を離れる生活が始まる。学生村の生活は明けても暮れても勉強一筋で、民宿の明かりが窓側の廊下のガラス戸を通して夜遅くまで情緒を持って漏れ出す。ある日、逗留者の私と食事の際に向き合った数人が、首を傾げている。“私の行動が不可解なのである。”彼等と同じく勉強をしている私に対してである。昼間は畑、夜になると勉強している。好天気になると、なんとなく消えている(山男です)。そして、3、4日もするといつもと変わらない日常を送っている。大学院受験のために、訪村、逗留している一人が“貴方は何! ”。この語は未だに、私の生き方に作用している。私に接する方々の“感じている様子”が見てとれる。私の行動が全く人に左右されない自然人と映ったのであろう。新行の方々(特に蕎麦屋や長逗留した民宿)とは未だに、関係が続いている。長野県人の頑固な性格と一致し、見えない絆で、私の性格が受け入れられたのであろう。私は機械ではない。彼の紹介で茅野市のあるお寺にお世話なる事になった。前年11月に晋山式(世代交代)を済ませた新住職とは3歳の時から付き合いである。これまた、長い付き合いである。晋山式に列席して、走馬灯がぐるぐると回って、涙が止まらなかった。身内の語らず解る心境であろう。“本当の絆、思いやりとはなにか?”とは接した4代に渡る住職達から、何も形が有るわけではなく、日常の態度で自然に教わった。現在の私の生きざまである。特に、大病を患った私には“見えないもの“で救って頂いた人々である。人を見下す者、利用する者も居るであろう。どうでも良いことである。その方がそれで幸せに感じるならば良い事である。思いやりとはそういう事と教わった。別に意識する事ではない。意識すると、無限地獄の悩みに落ちて行くであろう。“絆、絆“意識すべき事ではない。歩んで来た人生で出会った人々と極自然に付き合えば、その関係”絆“は築かれるであろう。それが、目に見えない”絆”であろう。何をしてあげられるか?。各個人の他人に対する思いやりが有れば、見ず知らずの人々におのずと答がでるであろう。

茅野も入る諏訪とは、諏訪は“広く謀ること”訪は“大勢に謀ること”の意味である。今回、TMS研究会が音頭をとって、MSの新年会を開催した。私の“絆“の思いで意を決して実行した。景気が悪いと伝わってくるMS業界は、少しでもMSに携わるなら、一堂を介して”絆“を別に意識しないで交友を深めたいものです。絆を深めるには、”タラチリ、フグチリ ちりぬるを(季節が終わらぬうちに鍋を囲もうか、という心)“です。生田流の古曲に“笹の露”がある。しばし、琴を聞いて、酒を組み合わせてみましょう。

歌詞は、酒は量りなしと宣ひし聖人は上戸にやましましけん、三十六の失ありと、いさめ給ひし佛は下戸にや、おはすらん、何はともあれ、八雲立つ出雲の神は八しぼりの酒に大蛇を平げ給ふ、是皆酒の徳なれや大石さけつる畏みも帝の酔の進みなり、姫の尊の待ち酒をささよ、ささとの言の葉に傳へて今世の人も、きこし召せささ、～～、劉伯りんや李太白、酒を飲まねば只の人、吉野、龍田の花紅葉酒が無ければ只の処よい～よいのよいやさ。(注釈：笹の露は別名：酒と称し、酒の徳を高唱した歌)

今回は御湖鶴の近藤社長に冬の仕込み作業の時期に無理を言って講演をお願いした。参加者を代表して感謝を表したい。